

# NGOの振り返り

八木 巖

興味深いシンポジウムがありました。「ともに語り合う『人権・開発・平和』これまでとこれから、NGOの関り」と題したもので、日本平和学会・北陸地域研究会と名古屋NGOセンターの主催で1月25日に開催されました。スピーカーは宇井志緒利さん(元AHIワーカー、立教大学教員)、佐伯奈津子さん(インドネシア・アチェ州で活動、名古屋学院大学教員)、羽田野真帆さん(名古屋難民支援室コーディネーター)で、それぞれが活動へ関る経緯、強い想いを話されました。メインスピーカーの宇井さんはNGOを定義した後に「NGOは言われなくてもするし、言われてもしない」というとても強いアピールを出されていました。この原点を確認し、今を考えるというのがシンポジウムの趣旨でした。そして現状を「NGOの存在感が薄れ、社会的なインパクトを発揮できなくなっている」ととらえて、その原因をさぐるというものでした。それは、NGO・市民社会の東海地域のあゆみをふりかえりつつなされました。答えの一つはこういうものです。参考資料を引用すると、「NGOが社会的なインパクトを発揮できなくなった原因については様々な要因が考えられる。一つには内外の情勢変化のなかで、NGOにはより広範な課題への取り組みがもとめられるようになり、期待に応えるために組織と事業を拡大した結果より多くの資金が必要となり、助成金や委託事業に頼る傾向におちいった」とされています。

いくつかのNGO関係者と話していると「NGO=Non Governmental OrganizationのN、つまり非政府組織の非がなくなった」ということを冗談めかして話されます。これが「対話」路線の一つの側面です。それがすべてではなく、あくまで一側面ですが、原因が金というのは悲しい話しですが、NGOにとって資金の問題は最重要課題です。非利益団体といえど赤字を積み重ねて活動することはできません。これからNGOはより大きなお金を政府に要求していかざるをえないですが、それが「非政府」を保障しつつできるかという岐路にあると思います。政治に関することを嫌うNGOは確かに多い。

私が市民運動・平和運動、NGO活動について考え始めたのは伊勢志摩サミットの時でした。サミットに対して不戦へのネットワークは二つの対応をとりました。一つは伊勢志摩市民サミットに参加しての「平和への

権利の法制化に賛同してください」という提言。もう一つは実行委員会に参加して「サミットに異議あり」という街頭デモ行動。サミットに対抗するNGOの対応を本でしらべると、学者のなかではNGOは「対決型」と「対話型」の潮流に分かれているとするものが多い。サミットに対してだけでなく社会の諸課題の解決の仕方もちがう、ということだろうと思います。「デモ」か「行政参加」かということになるのだろうか？ こうした分類もそもそもどうかという意見もあると思いますが、運動を担っている人たちに会うと確かに色合いは少し違う。用語の使い方からして違う。お互いへの批判的な意見を聞くこともあります。しかし、「社会を変える」というのがどちらの運動にも共通した目的です。目的は共通でも運動のあり方はさまざまであることは自然ではあります。

私はNGO団体が自身の現状を分析し将来の姿を考え始めたのは大事なことだと思います。一方、平和運動・市民運動もこれまでの歩みを振り返ってみることも必要なのではないのでしょうか？ 私たちは社会にインパクトをあたえているのか、身の回りの課題を解決するための効果的な活動をつくっているのか、などです。

この秋に平和学会のイベントに参加する機会がありました。そこで気づいたのが、とても多くの学者さんやNGOで活動している人達が辺野古のゲート前の抗議行動に参加しているということです。NGOも市民運動も想いは同じところにあると感じました。市民運動はさまざまな形をもっています。幅広く広範になされることがとにかく大事。見直しも大事。

## (特活)名古屋 NGO センター

貧困・紛争・環境破壊などの地球規模の課題を解決するために、市民が主体となり取り組む活動を中部地域にて支援することをとおして、人権、平和、環境が守られる社会の創造をめざす団体。  
不戦へのネットワークも団体加盟をしています。

## 名古屋NGOセンターへの寄付

郵便振替

【口座名】 特定非営利活動法人名古屋  
NGO センター

【口座番号】 00860-5-90855